

# “働く” セカンドライフを作り出す

2013年1月18日(金)  
NHKラジオ



秋山弘子 東京大学高齢社会総合研究機構特任教授。岡山県立朝日高校卒。イリノイ大学でPh.D(心理学)取得、米国の国立老化研究機構(National Institute on Aging)フェロー、ミシガン大学社会科学総合研究所研究教授、10年から社会技術研究開発センターの新規研究開発領域「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」研究総括も。日本学会協議会会員。専門はジェロントロジー(老年学)。高齢者の心身の健康や経済、人間関係の加齢に伴う変化を20年にわたる全国高齢者調査で追跡研究。近年は超高齢社会のニーズに対応するまちづくりにも取り組むなど超高齢社会におけるよりよい生のあり方を追求している。最近の著書・論説に「長寿時代の科学と社会の構想」(『科学』2010年1月号)、「新老年学 第3版」(東京大学出版会、2010年)、「自立の神話「サクセスフル・エイジング」を解剖する」(上野千鶴子他編『ケアという思想』:岩波書店 181-194, 2008年)

日本は世界の最長寿国です。20世紀後半だけで平均寿命の30年延長という驚異的な「寿命革命」を達成して、人生90年といわれる時代になりました。これからほんの20年先の2030年には、65歳以上の高齢者が人口の3分の1になります。そのうちでも急速に増加しているのが75歳以上の人口で倍増します。そして2030年には4割の高齢者が一人暮らしをしていると予測されています。つまり、80歳、90歳代の一人暮らしが一般的になります。世界のどの国も経験したことのない超高齢社会が日本に到来します。人口高齢化の影響は医療や福祉の領域にとどまらず、経済・産業・文化の広い領域で相互に関連する複雑な課題を提起しており、解決するためには社会の高齢化に応じた新たな価値観の創造と社会システムの抜本的見直しが必要です。

日本全国で約6,000人の高齢者を20数年にわたって追跡調査した結果、約8割の人が70歳半ばまで一人暮らしができる程度に元気ですが、それ以降自立度の低下が始まることがわかりました。この70歳半ば以降の人口が今後20年で倍増することを考えると、今、私たちが急いで何をしなければならないかは明白です。

25年に渡り高齢者を調査している。今までは騎馬戦だったが今後は肩車になる(一人で一人を支える社会)。会社を退職後も殆どの60代は元気。無理なく働くことにもっと価値をみいだすべきだと考え研究をすすめている。働くことはまず健康に良い。75歳位から体力が低下、支援が必要になってくる。20年先には75歳人口が20%になる。働くことが健康に結びつく。

2006年に東京大学内に高齢社会総合研究機構をつくった。柏の豊四季団地(東京のベッドタウンで65歳人口が35%を超える。この比率は日本全国の2030年の人口構成に似ている)にでて新たな実験を開始した。

リタイアした人との話し合いでは、自転車でいかれる範囲で、自分で時間を決めて働きたい(フルタイムではない)の意見が多かった。

柏は元は農地。住宅地のあちこちに休耕田が散らばっている。そこで休耕田を借りて農業を始めた。現在5、60人が働いている。

人生90年時代、二毛作時代がきた。60歳位までのオフィスでの仕事にプラスし、新たな農業に挑戦し、ネギ・小松菜などを作っている。高齢者には最低賃金を払っている。

かつて経理をしていた人は、農家の経理の面倒をみているし、働く人の時間がバラバラなため、現役の頃、労務管理をしていた人はそのノウハウでアドバイスをしている。始めは単純な農作業だけであったが、徐々に自分の過去の経験を農業に生かしている。畑で働くだけではなく自分の専門分野を生かす生活に変わってきた。働く人々は仲間ができて笑顔が多くなった。

ひとつは、下降の始まる年齢を2年でも3年でも先に延ばすこと、すなわち、自立して生活できる期間、健康寿命の延長です。もう一つは、高齢者人口の高齢化により、確実に増加が予測される助けが必要な高齢者の生活を支援する社会のインフラ整備です。

私たちは、まだどの国も解決したことのない高齢社会の課題に挑戦し、世界に先駆けてモデルをつくっていかねばなりません。多くの課題は、日常、私たちが生活する場にあるため、私たちが生活するコミュニティの課題を解決し新たな可能性を追求する具体策を考案して、実際にやってみる社会実験はひとつの有効なアプローチです。このような取り組みには、従来の縦割りの学術分野に閉じこもらず、他の分野と連携する柔軟性が必要です。さらに、学術の世界を超えて、自治体や企業、住民と協働し、創造力を駆使して粘り強く現場の課題に取り組んでいく新たな形の研究体制と研究方法が求められます。

また柏は夫婦で都心に働きに出る家庭が多く、子供達の教育も手伝っている。商社経験者は英会話を教えている。

高齢者の安定した雇用の機会を提供することが基本。採算性がないと定着しない。継続性を重視。

秋山さんは1960年代後半、東大に在学、のち米国に留学。ジェロントロジー(老年学)を学んだ。アメリカの高齢者は一人暮らしが多い。そこで自立が大切。そこで自立という観点から研究をすすめてきた。日本は親子、孫と住むケースが多い。

アメリカの大学院は社会人の学生が多く若い人にも良い影響を与えている。

日本の人口は急速に高齢化が進んでいたもので、単身で日本に戻り、東大で老年学を立ち上げた。分野横断の組織作りが難しかった。

大学本来の「真理の追究」にプラスし、「社会の課題を解決」する組織が出来た。大学内の研究室での研究だけでなくフィールドにでての研究は学ぶことが多い。

75歳以上の人々のエイジング イン プレイス(住み慣れた所で年をとっていく!)が大切。

セカンドライフの生き方を方向づけたい。